



テタロクヤン

「こちらにどうぞ、おかけください」の意味

原島則夫さん(71)＝少数民族懇談会(札幌)会長

—ご出身は。
日高管内新ひだか町静内地区田原です。地元の高校に進み、経理などを学びました。それから働いて貯金をし、21歳で愛知県の福祉大学夜間部に入りました。

—その後はお仕事は？
大学2年の夏に父が病気になる、北海道にもどりまして。札幌で市営地下鉄東西線の工事現場でも働きました。翌年、勤労者医療協会の厚賀診療所(白高町)の職員に採用され、10年間医療事務の仕事をしました。それから「札幌市ウタリ生活相談員」という仕事をし、その後、共産党北海道委員会で働きました。

—なぜ、そのお仕事を選びましたか。
学生のころ、共産党が「アイヌ民族の課題を考えていく」と綱領(政党の考え方を書いた文)に書いたことをニュースで見たんんです。30年ほど働いた中で、日高地方を回って地域のひとと懇談し、アイヌ民族についての政策づくりに参加したこともありまして。

■キセル、たばこ入れ
キセルやたばこ入れは、美しい彫刻をほどこした工芸品でもありました。今はたばこは薬を紙で巻いたものが売られていますが、キセルが使われていた時代は男女ともすてきなデザインの花びら入れを帯に下げていました。最近では女性がたばこを吸うことについて、体によくないというだけでなく、「えらいそうだな」とか「品がない」という声もあります。これはアイヌも和人もそうです。昔話にはそんな価値観は登場しません。女性はつつましく遠慮がちな方がよいという考え方は、新しいものかもしれません。

キセルは、ノリウツギという木の、形のよい枝を選んで作ります。火皿、たばこをつめるところ、や吸い口が、石や金属でできたものもありました。たばこ入れは木製で、ガラスなどつやのある素材をうめこんでかざりました。

村長が狩りに行くと、不思議な男性がクマに変身した



これは登別市幌別に伝わってきたお話です。アイヌ社会にたばこがもたらされたのは、それほど古いことではありません。たばこの入手先としては日本や中国が考えられますが、これらの地域にたばこがもたらされたのも1600年ごろと新しい出来事です。1643年にオランダ入航海士フリースが北海道を訪れたころには、すでにきつえんの文化が広がっていました。

当時のたばこは高級な輸入品でしたので、神々へのささげ物ともなりました。また正式に人を訪問する時には、敬意を表すためにたばこをすすめる儀式が行われました。まず相手のキセルを受け取って自分のたばこをつめ、ていねいに相手にすすめます。相手も同じようにします。これは、自分のたばこをプレゼントするということで、受け取った人は拝礼をしてからたばこを吸い、会話を始めます。



銀のキセルの声を聞いて、ピンチを切りぬける村長

たばこは神へのささげ物

「私はヌプリノシキコロク(山の中央をおさめる神)だ。おまえがヌプリケスングルにささげた宝刀は、神界にも並びない真の宝。このような宝をなげ人が持つている。この宝刀をおまえの父に授けた神を探ったが、一向に分からぬ。そこでおまえに聞くことにした。心して答えよ。答えられねば命はないと思え。聞けば、どうも私がささげた刀を、ヌプリケスグルが神々に自慢して、おこった神々の腹いせに私が呼ばれたようです。私はおそろしくも腹が立ちました。どうしようかと考えながら「たばこを吸う間、待ってほしい」と言って銀のキセルを出すと、なんとキセルが私だけに聞こえる声で話しはじめました。

「私の話をしっかりお聞き。あの刀はコタンコロカムイ(シマフクロウ神)の父が、あなたの父の心かげに感心して授けたものだ。」私はこれを聞いてホッとしました。それから何くわぬ顔で「神ともあろうものが、自分の分かれぬことを人にたずね、分かれなければ殺すなどとは」と言って宝刀の由来を語りました。その場にはコタンコロカムイの息子もいて青ざめています。そして山の中央の神に抗議し、わびの印として山のような宝を受け取りました。

銀のキセル、ウラシペツの村長を救う

＝登別市幌別の話
(金成マツのノートより)

私はウラシペツの村長です。心がけのよい働き者の妻と幸福に暮らしていました。ある年のこと、それまでなかったような食糧不足が起こりました。山にも川にも食べる物がなくなり、狩りをして魚をとりに行っても何も手に入りません。村人たちもおなかをすかせて、このままでは死んでしまいうつです。

私が山で獲物を探していると、1本の大きな木のそばに不思議な男性が立っていました。そばにはたくさん肉をまとめた荷物が置いてあります。男性はすつと木の後ろに行き、反対から出てきた時には大きなクマの姿になっていました。今の今まで、動物のかけさえ見えませんでした。このクマをしめれば村人に食べさせることができます。

実はこの男性は、クマの神の中でも気のあらい神とされるヌプリケスグル(山裾の神)で、私たちが困り果てていることを知って食べ物をお届け、自らも獲物となって村を救ってくれようとしたのです。私は深く感謝しながらクマをうちました。それからクマ神にお礼をするためにイナウをけずってのりしました。その時、いつもお守りとして持ち歩いていた宝の刀、神から授けられた刀をイナウにしばって一緒にささげました。

そんなある日、私は山へ行きたくなりまして。そこで、父から受けた宝物のたばこ入れと銀のキセルを持って出かけることにしました。何かに引き寄せられるような感覚で高い山の上へ上ると、そこには金の家がたっていました。中から呼ばれて入ってみると、金にかがやく家の中には六つのいろりが並び、たくさん神々が所せましと座っていました。入り口の近くに少しだけ空いた所を見つけて座ると、家の主が話し始めました。

引き寄せられるように山へ。金の家に入ると、神々が待ち受けていた

